

## プーシキン作《ONEGIN》 題辞の《表層解釈》

齋 藤 裕

キーワード

オネーギン (Eugene Onegin), プーシキン (Aleksandr Pushkin), 表層解釈 (Surface Interpretation), 題辞 (エピグラフ) (Epigraphi Motto)

### 《まえがき》

プーシキン (アレクサンドル・セルゲーエヴィチ) (1799-1837) はロシア文学における最大にして最高の詩人であると称されています。その生涯や文学史上の意義についてはすでに優れた伝記や文学史の労作があるので、詳しくはそちらに譲ることにしましょう。<sup>注1)</sup> プーシキンの一生は決闘によって劇的に閉じられましたが、短命だったわりに驚くほど多くの詩歌 (政治詩, 恋愛詩から物語詩, 叙事詩, 劇詩に至る) をはじめ、多種多彩な小説や戯曲を書き残して、それ以降のロシア文学の展開に絶大なる影響を与えました。

プガチョフの乱を題材にした歴史小説『大尉の娘』やピョートル大帝を謳った詩『青銅の騎士』などは比較的知られています。また短編小説集『ベールキン物語』や中編の伝奇小説『スペードの女王』をおもしろく読んだ方もいるかも知れません。

なかでも、バイロンの『ドン・ジュアン』(1819-24) に触発された《韻文》による長編小説『エヴゲーニイ・オネーギン』[以下《オネーギン》と略称] (八章) (1825-30) は、プーシキン独特の「光明と嬉戯とにあふれた」(メレシュコフスキー) 作品ですが、作者の思想、感情を融通無碍に織り込みつつ、当時のロシアの社会と自然の万華鏡ともいふべき代表作に仕上がっています。

この小論は『オネーギン』のフランス語による題辞 [エピグラフ] をとりあげて、いくつかの問題点を中心に表層的な解釈<sup>注2)</sup>を加えるものです。おのずと微視的な観点か

ら文章の各部をていねいに考察することになります。

さて、エピグラフ [Epigraph] (露語・英語)<sup>注3)</sup> というのは、書物の冒頭や各編・章の初めに置かれた短めの文章のことで、起源はるか古代文明の金石文にまで、西洋にかぎってもギリシアやローマの墓碑や記念碑に彫られた碑文・碑銘 [inscriptionともいう] にまでさかのぼるようです。

欧米の文学作品にあっては、小説や詩などで、現在に至るまでしばしば見かけます。<sup>注4)</sup> たいていは、有名な文章の一部から引用してあって、作品の意図や主題をかい摘まんで提示したり、暗示したり、味付けに添えたりするものです。ひょっとアフォリズム (警句・箴言) に見紛うものもあります。

ロシアの文豪レフ・トルストイの長編小説『アンナ・カレーニナ』(1873-77) の冒頭に、エピグラフとして、新約聖書から引用した「復讐するは我にあり 我これを報いん」[ロマ書・12章19節] という一文が載せられていることはあまりにも有名です。

なにはともあれ、論より証拠、まず十八、十九世紀の欧米の文学作品に則して、有名な作家のエピグラフをいくつか紹介しておきましょう。

『群盗』(フリードリヒ・シルラー) (1781)

「葉、これを醫 [いや] さざれば、剣、これを醫す。

剣、これを醫 [いや] さざれば、火、これを醫す。」

ヒポクラテス (久保栄 訳)

『赤と黒』(スタンダール) (1830)

「すこしはましな連中を／幾千集めてみたところで／籠は陽気になりはせぬ。」

(第一部・一章) ホップス (富永明夫 訳)

『盗まれた手紙』(ポー) (1840)

「知恵にとって、あまりに明敏すぎることはほど憎むべきことはない」

セネカ (丸谷才一 訳)

『悪の華』(ボードレール) (1857) [1861年の再版で削除]

「人は言う／忌まわしきものは忘却の井戸に沈め／また墓のうちに閉じ込めるべきだ、／書かれたものによってよみがえった悪は／後の世の風俗を汚染するであろうと。／だが 悪徳の母親は決して知識ではないし、美德は無知の娘ではない。」

アグリッパ・ドービニエ『悲愴集』より (安藤元雄 訳)

プーシキンはこうした洒落た趣向がいたく気に入っていたらしく、その著作でさかんに用いています。たとえば

『ペールキン物語』(1830) [五編の物語すべてに題辞あり]

「身分低き十四等官なれど、この宿場では独裁者」[駅長]

ヴィヤーゼンスキー公爵

『オネーギン』(第一章) (1833)

「生きることに心せき、感ずることも急がるる」

ヴィヤーゼムスキイ公爵<sup>注5)</sup>

『大尉の娘』(1836)

「若いときから名を惜しめ ことわざ」(全体)

「若い衆よ、まあ聞くがいい。わしら、爺[じい]の昔がたりを 歌謡」(六章)

こうした背景としては、まず第一にプーシキンが子供の頃より慣れ親しんでいたラシーヌ、モリエール、ヴォルテール、J.J.ルソーといった一連のフランス文学の素養、さらに、成人後にはジョージ・G・バイロン(1788-1824)やウォルター・スコット(1771-1832)などの英文学のロシアへの浸透を指摘してもよいでしょう。<sup>注6)</sup>ただし当然ながら、作家によって、また同じ作家でも作品によって題辞を添えない場合もあります。

同時代の英国の作家の中では、当時ロシアで大いに流行して、『大尉の娘』などにも影響を与えたとされるスコットの歴史物語の連作《ウェイヴァリーもの》(1814-31)はその多種多彩なエピグラフで知られていますが、他方、ジェイン・オースティンの作品[『自負と偏見』1813／『マンズフィールド・パーク』1814]には題辞が見当たりません。

『ドン・ジュアン』(1819-24. バイロン)

「一般的なる事を特質的に語るは難し」

ホラチウス (小川和夫 訳)

『ケニルワースの城』(第三章)(1821. スコット)

「いいや、俺ゃ約束は守る——勝負はやる、やめたりはしねえ、この楽しい賭け事を、勝負をやる気で一旦いったことは、如何にしらふでも守り通すからそう思ってもらいてえ」 「賭事卓(かけごとづくえ)」(この作不明) [朱牟田夏雄 訳]

一方、フランス文学でも『マノン・レスコー』(アベ・プレヴォ)(1731)や『カストロの尼』(スタンダール)(1839)には題辞がありません。また、プーシキンが称賛したというメリメの作品では『ヴィーナスの殺人』(1837)では、次のようにローマの作家ルキアノスの引用が添えられていますが、『ドンファン異聞』(1834)には題辞が見えません。

「おてやわらかにねがいたいものだ。力もあるらしいが、／同じくらい慈悲深くあってほしい」わたしは言った。 ルキアノス作『うそつき』[杉捷夫 訳]

ともあれ『オネーギン』本文に散りばめられた「アフォリズム的表現」の場合と同様、この作品に添えられた絢爛たるエピグラフの背後には、ギリシア・ローマの古典やヨーロッパの文学、とりわけ「フランス文学」の「豊かな素養」が控えているのを見逃すことはできないでしょう。[木村浩「プーシキンのアフォリズム」]

さて『オネーギン』には全八章のそれぞれに題辞が付されていますが、ここでとり扱うのはそれらとは異なり、作品全体のいわば総《題辞》にあたるものです。このエピグラフは『オネーギン』第一章が分冊で刊行されたおりに(1825. 2. 15)初めて発表されたもので、その際には《自序》(後に削除)も添えてありました。この序文[ロシア語]

は小論の末尾に《付録》としてその和訳と注釈を載せることにしましょう。

じつは、この作品には後になって、さらに念入りにも《序文》[プロローグ]にあたる詩が付け加えられています(1828. 第4章および第5章の公刊のさい)。つまり《序詩》[ロシア語]になるわけです。

言うまでもなく、《序文》や《前書き》は《題辞》とは基本的に性格や位置づけが異なっており、概して、執筆時点の状況に応じて、作者の考えや心情がはるかに生々しい形で表現されています。著者自身による作品の注釈ないしは解説と言えなくもありません。

《序文》や《前書き》の解明にあたっては、通り一遍の《表層解釈》では処理できない種類の困難、課題があることを覚悟しなければなりません。

### 《題辞の表層解釈》

- 1) Pétri de vanité il avait encore plus de cette espèce d'orgueil  
qui fait avouer 2) avec la même indifférence les bonnes comme  
les mauvaises actions, 3) suite d'un sentiment de supériorité,  
peut-être imaginaire. 4) Tiré d'une lettre particulière.

このエピグラフを解釈するにあたって、現在までに公刊された訳本から四つだけ選びだして、自由に比較しつつ対照しながら、検討して行くことにしたい。それらの訳文の分析、批判を通じて、この文章の《表層解釈》にともなう問題点がはっきりと浮かび上がってくるはずである。ことの性質上、文章の語句の細かい用法、微妙なニュアンスにまで立ち入らなければならない。

これから行う作業は決して先学の業績のあら捜しをして、その誤謬や勘違いを槍玉に挙げようとするものではない。あくまで『オネーギン』の題辞の《表層解釈》の妥当性を追求し、整合性を高めることにより、最終的には、この古典的作品の《全体的構造を明らかにする》ことが目標である。

これら四書は現在までに公刊された主要な和訳であり、それぞれ[甲]は先駆的な著作として、[乙]は手軽な文庫として、[丙]は現在の代表的な翻訳として、[丁]は最新の労作として取り上げることにした。ちなみに、本文の訳は[甲]と[乙]は散文訳、[丙]と[丁]は韻文訳である。また他の翻訳[中山省三郎その他]も必要に応じて引用することにした。

[甲] 虚栄心に充満した彼は、尚その上一種特別な増上慢に捕はれてゐる。ほかでもない、至極怪しげな優越感の結果、いつも同じ無関心な態度をもつて、善行悪行の別ちなく、すべてを告白する事なのである。

ある私信の一節

[《米川正夫訳》養徳社. 1949/『岩波文庫』1927/叢文閣1921]

[乙] 彼は虚栄心に満ちあふれ、そのうえに、よきふるまい悪しきふるまいおしなべて、冷ややかに打ち明けるほどの驕<sup>おご</sup>れる心を持っていた。おそらくは架空のものであろう優越感の、結果である。ある私信の一節

[[池田健太郎訳]『岩波文庫』初版1962, 改版2006.]

[丙] 彼は虚栄心にみちあふれ、その上さらに、よき行いもあしき行いも同様な無関心さをもって告白するという特殊な傲慢さを身につけていました。優越感の、しかもおそらくは架空の優越感の、これは結果なのです。ある私信の一節

[[木村彰一訳]『プーシキン全集2』河出書房新社, 1979年]

[丁] あの人は虚栄心の塊でしたが、悪い行いも善い行いも同じように淡々と告白するといった一種の傲慢さをさらに多く持ち合わせていました。これは恐らく架空の優越感から生まれたものでしょう。ある私信より

[[小沢政雄訳] 群像社, 1996年]

#### 1) Pétri de vanité il avait encore plus de cette espèce d'orgueil

冒頭の部分。歩調を合わせるように、ほとんどの先行訳が《vanité》と《orgueil》にそれぞれ《虚栄心》と《傲慢(さ)》という日本語を宛てているが[金子幸彦訳, 木村浩訳も同じ] どんなものだろう。《見栄っ張り》, 《虚飾》《見栄ん坊》, 《傲岸》《高慢》《自負》のような語句の可能性が考慮されてもいいのではないか。[甲] が《虚栄心》の語句で口火を切って、後続の三者が追隨しているように見えなくもない。が、一方《orgueil》については[甲] の《増上漫》というやや古風な訳語が一人、生き生きして見えるのは皮肉である。

《pétrir》(こねる, 形作る)に由来する《pétri de ~》は、あれこれ工夫すると《虚栄心の塊》[丁][三省堂『クラウン仏和辞典』参照]とか《見栄っ張りそのもの》といった訳語に落ち着くだろう。ただし「あの人は虚栄心の塊でしたが」[丁]と訳したのは少し迂闊だった。

さて、それに続く《encore plus》《その上さらに》, 《輪をかけて》というしつこい口ぶり(類似の en plus より強い表現らしい)から, 《orgueil》がさらに始末の悪い性向であると暗示されているようだ。《自らを真価より高しとする傾向》を意味しているので, 《思い上がり》《自惚れ》ということばにも惹かれたものの, 試訳では《傲岸不遜》なる強い表現を用いてみた。

[類似の語句《bien plus》の次の用例を参考にされたい。

Elle n'aime pas son mari, bien plus, elle le hait.

あの女は夫を愛していないどころか, 憎んでいる]

[三省堂『クラウン仏和辞典』1978]

《cette espèce d'orgueil qui fait avouer……………》の部分について「一種の傲慢さ」

[丁]「一種特別な増上慢」[甲]「特殊な傲慢さ」[丙]とするのはおかしい。ここは「打ち明けるほどの驕慢れる心」[乙]とするのが、どちらかといえば正しいのではないか。文法的に言えば《cette espèce ~ qui……………》という構造であろう。つまり《……………するような種類 (espèce) の～》ということだと考える。

## 2) avouer avec la même indifférence les bonnes comme les mauvaises actions

この箇所はなんの変哲もないようだが、細かく見ていくと、いくつか疑問が湧いてくる。《avec la même indifférence》はさしあたって《同じように無関心に》というぐらゐの意味に取ることができる。が、《何と何とが》同じなのかで、訳者によって解釈は分かれている。《いつも同じ》[甲]とするのはとても無理だろう。この訳者はとにかく訳語がすべる傾向がある。後ろの《善行も悪行も》という部分に結びつけて解すべきであろう。

ここで問題にしたいのは《indifférence》という言葉である。既訳を見ると《無関心な態度をもって》[甲]《冷ややかに》[乙]《無関心さをもって》[丙]《淡々と》[丁]となっている。大同小異である。ところが、この《indifférence》がじつはなかなか厄介なのだ。

それは、この形容詞《indifférent》の用法を調べてみるとはっきりする。

たとえば『仏和大辞典』[白水社. 1991]では1.「(に) 無関心な」という語義に加えて、2.「(にとって) どちらでもよい、重大でない」という語義をあげている。

Il est indifférent de faire cici ou cela. これをしてもあれをしてもどっちでもいい。

こう取った場合「これをしてもあれをしても」「どちらであろうと構わない、無関係だ」という意味になるだろう。

また他の辞典によれば、同様な例として

Je ne sais pas quoi faire: il m'est indifférent de partir ou de rester.

[DICTIONNAIRE DU VOCABULAIRE ESSENTIEL MATRE] (1975)

またさらに、別の辞典では

Cette femme m'est indifférente. あんな女に興味はない。

『小学館ロベール仏和大辞典』1988]

という用例もある。《あんな女なぞ、おれにはどうでもいい》ということだろう。この語義は、案外見落とされたり、誤解されやすいので注意を要する。

問題の箇所にしても、後ろの《les bonnes comme les mauvaises actions》と関連づけてみたらどうだろうか。つまり《善い行いであれ、悪い行いであれ》そんなことはお構いなくというかかり具合に取るのだ。前後の脈絡からしても、《傲岸》《高慢》なのは「よき行いもあしき行いも同様な無関心さをもって告白する」[丙] 点にあるより《善行悪行なぞお構いなく同じように告白する》という点に重心がかかっているのではないか。

わたしはむしろそう取りたい。

むろん《あれか、これか》と割り切ることは無理だとしても、原文では後者の意味合いが微妙に響いているのは間違いない。従来の訳にあつては、そうしたニュアンスが無視されている。ここでその点に疑義を呈しておきたい。残念ながら、片手落ちなのである。(例外として「善行悪行の別ちなく、すべてを告白する」[甲]と訳しているのは、それなりの見識であろう。)

もっとも、上記の辞典によれば、フランス語における《indifférence》の「無関心である」と「どちらでもよい(無差別)」の両義の表現にはそもそも《あいまいさ》がつきまとっているのです。試訳としては、むしろその《あいまいさ》を極力活かすべく、《善行であれ悪業であれおよそ無頓着に告白する》としてみた。

蛇足ながら、《indifférence》(名詞)自体についても《dans l'indifférence generale》[世間一般の無関心・冷淡]／《liberté de indifférence》[無差別の自由]のように上で述べた両方の意味があることを指摘しておこう。<sup>注7)</sup>

### 3) suite d'un sentiment de supériorité, peut-être imaginaire

この部分についてキーワードになるのは《peut-être imaginaire》の語句である。既訳をざっと見てみると、ここの訳文は「おそらくは架空のものであろう優越感」[乙]「優越感、しかもおそらくは架空の優越感の」[丙]「これは恐らく架空の優越感から」[丁]と、見事なまでに《おそらく(は)架空の》の一本槍で共通している。

これはあんまりではないか。《架空の人物》ならいざ知らず、《架空の優越感》という表現はまともな言語感覚を逸脱している。手元の小辞典でさえ「想像の、[数] 虚の」と出ている。[『新仏和小辞典』杉捷夫、白水社、1962]<sup>注8)</sup> むろん《空想の優越感》とか《想像的優越感》[中山省三郎訳]としたところで、五十歩百歩の違いでしかない。

ここでこそ翻訳家あるいは文学者の、それこそ想像力の見せどころではないか。関連語の《s'imaginer》には「思い浮かべる、思い込む」という意味がある。「～ tout savoir」は「なんでも知っていると思ひ込む」ということだ。

フランスの文豪モリエール [Molière] (1622-73) に『気で病む男』[内藤濯訳]という喜劇があることはよく知られている。この作品には『病は気から』[鈴木力衛訳]『ひとりぎめの病人』[石沢政雄訳]という訳もつけられている。『気病み』[辰野隆]もあった。<sup>注9)</sup>

このフランス語の原題が『LE MALADE IMAGINAIRE』(1673初演)であることを、『オネーギン』の訳者たちは、どうやら、ご存じなかったらしい。<sup>注10)</sup> この場合は、自分が病人だと思ひ込むことだ。とどのつまり《imaginaire》は「でっちあげた」「偽りの」「ありもしない」に通ずる。すなわち《虚》である。

数学の分野で《実数》に対して《虚数》と訳したのはお見事である。これらの日本語

の書名、術語を見るにつけ、訳者たちの苦心のほどが偲ばれる。

さて、プーシキンに戻れば、けっきょく、この箇所は《自分が優れているという眉つばな思いこみ》《どうも独りよがりの優越感》の結果といった意味に取るのが妥当だということになる。

一方《peut-être》は英語の《maybe》と同様に《ひっとして、ことによると、あるいは》という意味合いであろう。また、辞書には名詞として「未必事、不確かなこと、疑わしいこと」（井上・田島編『新仏和中辞典』白水社、1983）とあるのも参考にしてよい。これを生かせば「疑わしい」という訳が出てくる。いずれにせよ、これまた一律に《おそらく（は）》と置き換えているが、文学の翻訳としては無神経に過ぎるように思う。

なお最初の部分は普通なら《par [またはa la] suite d'un sentiment》とあるところらしい。《par suite de ～》は「～の結果、ために」という意味である。

ここまでわざわざ言い残しておいたが、この部分は〔甲〕のみが「至極怪しげな優越感」と訳している。《peut-être imaginaire》の表現する感じをなかなかよく掴んでいる。米川正夫の訳になる『オネーギン』は先駆的な労作ではあるが、その解説、注釈、本文の解釈、語感などにおいて、現在では歴史的な意義しかもっていない。が、それはあくまで《全体として》であって、この部分には当てはまらない。こんなことがあるから、古い訳も一概にあなどれない。新しいものが良いとは限らないのである。

#### 4) Tirée d'une lettre particulière

『オネーギン』のエピグラムの出典は、同時代のロシアやヨーロッパ諸国の詩人や作家（ジュコーフスキイ、グリボエードフ、バイロン）や近い過去のヨーロッパの作家、文学者、詩人（スタール夫人、マルフィラートル）、古典的詩人（ホラーティウス、ペトラルカ）などじつに多岐に亘っている。が、いずれもいわば公的に出版されたり、発表されたものであって、このエピグラムのように個人の手紙から引用された例はほかにない。<sup>注11)</sup>

後世のロシアおよびソヴィエトにおいて、いわば国民的文学英雄として祭り上げられた<sup>注11)</sup> 詩聖プーシキンの研究や注釈は、現在汗牛充棟もただならぬ観を呈している。それでも、まだ手つかずの部分や見落とされている視点もあるようだ。このエピグラムや序詩もあるいは一種の盲点なのだろうか。これらについて詳しく述べているのは、ナボコフを除くとあまりないようだ。<sup>注12)</sup>

ひょっとして、この手紙はプーシキン自らの手になるものかもしれない。トルストイの『戦争と平和』の描写からも窺えるごとく、当時のロシアの顯官、貴族たちの間では、宮廷や社交界の場ではもちろん、ふだんの会話や手紙のやりとりでも、フランス語がごく頻繁に、ごく自然に用いられていたのだ。フランス語を使うことは、取りも直さず上品な、優雅な、気取ったものと見做されていたらしい。じっさいプーシキンの手紙のう



ちかなり多くがフランス語で書かれている。<sup>注13)</sup>《オネーギン》に出てくる有名な《タチヤーナ》[田舎の地主貴族の娘である]の手紙にしても、原文は「フランス語」で書かれていたのを、ここで改めて確認しておく必要があるだろう。作者がわざわざロシア語に翻訳した形をとっている。

《まだ厄介なことがここに控えている／祖国の体面を傷つけぬため／

わたしは是非ともタチヤーナの／手紙を露西亜〔ロシア〕語に訳さねばならぬ／

彼女は露西亜語をよく知らないし／わが国の雑誌もろくに読まないし／

母国語でうまく気持を表せなかった／そこでフランス語で書いたのだ／

いたしかたない！　なんと言っても／未だかつて御婦人の愛の告白が／

露西亜語でなされた試〔ため〕しはないし／今に至るも我らが誇り高き言葉は／

郵便向けの文体には馴染んでいないのだ》

〔『オネーギン』第三章二十六節／齋藤 裕訳〕

前世紀末にフランスやドイツで流行っていた《書簡体小説》<sup>注14)</sup> [le roman par lettre] の影響の名残があると考えてもいいだろう。また、プーシキン作の『パールキン物語』[1831] が匿名で発表され、故人パールキンの聞書きを死後に発表する体裁をとったことも思い合わされる。

さらに想像を逞しくすれば、この手紙はプーシキンの創作になるのかもしれない。かりにそうだとすれば、この背後にプーシキンによる一種の自画像を見て取ることも可能になるだろう。むしろ、ナボコフも示唆するように、虚構ないしは韜晦というべきかもしれない。作品『オネーギン』における作者と語り手と《オネーギン》[主人公]の込み入った関係を解きほぐす上でも、これはなかなか興味をそそるし、慎重な検討に値することである。

しかしながら、この小論はあくまで問題の《題辞》の文章それ自体の《表層解釈》を目指すものであるので、この点はもう少し煮詰めてから、改めて別の機会に触れてみたい。

## 《試 訳》

あの男ときたら根っからの見栄っ張りでしたが、そればかりか、善行であれ悪業であれ、およそ無頓着に告白するといった底の傲岸不遜さを合せもっていました。が、あるいは、これは他人より優れているという勝手な思いこみのせいだったのかもしれませんが。

ある個人の手紙から

[注]

1) たとえば、ヴィッサリオン・ベリンスキイ『プーシキン論』、アンリ・トロワイヤ『プー

シキン伝』、D. S. ミールスキイ『ロシア文学史』など。

- 2) 「言語表現の細部事実から出発して作品の全体的構造を明らかにすること」を目的とする。  
その基礎としての「いわゆる訳読という作業」を「表層解釈とか一次読み取り」とか定義する。[篠沢秀雄《「地獄の一季節」(アルチュール・ランボー) 表層解釈の問題点》](『ふらんす』白水社. 1984-5)
- 3) エピグラフ(《題辞》)は《題銘》などとも訳され、英語では《motto》[標語]ともいう。  
ヴラヂミール・ナボコフや木村彰一はこれを使っている。
- 4) たとえば現代英国の推理小説家コリン・デクスターの作品にはどれも長々しい《題辞》がやたらと出てくる。ここまで来るとキザを通り越して嫌みである。
- 5) 米川正夫訳『オネーギン』の文章による。この部分はつとに名訳の誉れ高い。
- 6) 「『バイロンの会話』! ウォルター・スコット! それが魂の糧だ!」(1824.11. 弟宛のプーシキンの手紙)。ちなみに、ゲーテ、シラーといったドイツ文学も、すでに十八世紀にジュコフスキーなどの手で翻訳され、ロシアの読書界に紹介されている。また、プーシキンの戯曲との関連では1825年ごろからの(おそらく仏語を介しての)シェイクスピアへの傾倒はきわめて重要である。
- 7) 次にあげる英語の《indifferent》の用法も大いに参考になるであろう。  
an indifferent feeling about whether to stay or not.  
「行こうと行くまいとどうでもいい感じ」  
I'm indifferent about whether you come or not.  
「(わたしは) あなたが来ようと来まいとどうでもいい」  
[『新選英和辞典』5版(小学館)1984]
- 8) 念のために付け足せば、この辞典をわたしは重宝している。
- 9) 今のところ『架空の患者』という訳名はまだ現れていないようだ。
- 10) ひるがえって、プーシキンがこの喜劇を読んでいたのはまず間違いないだろう。プーシキンが十歳のころ、モリエールをまねた喜劇『すり』をフランス語で書いたという逸話も残されている。プーシキンはリツェイ(学習院)の学友から「フランス人」というあだ名で呼ばれていたほどである。バイロンも主に仏訳で読んだようだ。
- 11) 『大尉の娘』のエピグラフでは小説の内容にふさわしく、歌謡・民謡・ことわざなどからの引用が目につく。
- 12) たとえば「プーシキンはわれわれにとってこの上なく貴重な国民的財産であり、われわれの魂、われわれの道徳にとって最高の規範であります」ドミートリイ・リハチョフ(元ソ連アカデミー会員・哲学アカデミー・プーシキン委員会議長)『ソヴェート文学』99号. 群像社. 1987. [中村喜和訳]
- 13) 『オネーギン(注釈)』(ヴラヂミール・ナボコフ. 1964改訂1975)のこの部分の記述は、フランス文学における《pétri》なることばの詮索に始まり、《vnité》をめぐるこの題辞

の出典を博搜する大掛かりなものである。が、要点は「この個人の手紙がはたして存在したのか、その書き手はだれか推測してもむだである」ということに尽きる。なお和訳のうち最も新しく、充実した内容・注釈をもつ小沢政雄訳ではまったく触れられていない。

- 14) 翻訳されたプーシキンの手紙のざっと三分の一がフランス語によるもの。[河出書房新社版『プーシキン全集』6巻(1974)に抜粋、翻訳して収録してある167通について。手紙は全部で約800通にのぼるという] ちなみに妻のナターリヤ宛にはいつもロシア語を用いているようだ。ユーリー・ロートマン『ロシア貴族』(筑摩書房)参照。
- 15) S.リチャードソン『パミラ』(1740)[英]、ルソー『新エロイーズ』(1761)[仏]、ゲーテ『若きウエルテルの悩み』(1774)[独]が代表的であるが、これらは十八世紀末から十九世紀初めのロシアの作家たちの《詩的源泉》であったといってよい。(金沢美知子編訳『可愛い料理女』彩流社、1999/解説参照)。またプーシキン自身にも未完の『書簡体小説』(1829)が存在するという。

## [付 録]

この《序文》に述べてあることがらは、単なる訳文だけではなかなか分かりにくいので、繁を厭わず、かなり細かい注釈を添えて、解明をこころみた。そんなわけで、訳文についても敢えて意識と直訳の二つを示してある。どうやらこの文章はかなり慌てた状態で書かれたようだ。

### [意訳] プーシキン作《ONEGIN》序 文

これは一篇の長い詩の冒頭なのであるが、この作品はおそらく完成されるに至らないだろう。『エヴゲーニイ・オネーギン』の二、三の歌(つまり章)はすでに出来あがっている。いろんな好都合な事情のもとで書かれたため、これらの数章は『ルスランとリュドミーラ』の作者<sup>注1)</sup>の初期の諸作品の特徴となっている快活さの名残をとどめている。

第一章はそれなりに或るまとまりを成している。これは一八一九年の終りに生きるペテルブルク青年の社交界の描写をふくみ、かの憂鬱なバイロンの戯作『ベッポー』<sup>注2)</sup>を思い起こさせる。

慧眼なる批評家諸氏は、もちろん、構想[プラン]の不足<sup>注3)</sup>を指摘するだろう。誰であろうと、第一章を読んだだけで、小説全体の構想についてあれこれ判断を下すのは自由である。主人公の性格ときたら、どこか《コーカサスの捕虜》[プーシキンの前作、1822]じみていて《反詩的》<sup>注4)</sup>であるとか、さらにまたいくつかの詩節にしても、最近の一連の悲歌[エレジー]<sup>注5)</sup>と同じように退屈極まるような調子で書かれていて、あらゆる人々を意気消沈させてしまう、とかいった非難を浴びせられることだろう。だが、願わくは、作者をして、読者諸君の注意を、風刺的な作家<sup>注5)</sup>にしてはまれに見る

長所美点に、すなわち侮辱的な人身攻撃<sup>注5)</sup>のないこと、また風俗習慣を冗談半分に描写しながらも厳しい礼儀正しさを遵守したことに、向けることを許されたい。

[1825年2月15日の第1章の分冊出版によせて]

[直訳]                      プーシキン作《ONEGIN》自序

これは一連の長詩の始めの部分なのであるが、この詩作はたぶん完成されることはないだろう。『エヴゲーニイ・オネーギン』のいくつかの歌（あるいは章）はすでに用意されている。いろいろと恵まれた状況下で執筆されたために、これらの数章は『ルスランとリュドミーラ』の作者の初期の諸作品の特色である陽気さの痕跡をとどめている。第一章は、それ自体で、ある統一を示している。これは一八一九年の終りにおけるペテルブルク青年の社交界の生活記述をふくみ、あの陰鬱なバイロンの笑劇『ベッポー』を彷彿させるものだ。

目敏い評論家の諸君は、むろん、構想〔プラン〕の欠陥を言い立てるだろう。誰にしても、第一章を読み終えたばかりで、小説全体の構想についてあれこれ意見をいうのは勝手である。わたしの前作の『コーカサスの捕虜』に似ている主人公の反詩的な性格も、さらにまた、わたしの最近の一連の悲歌〔エレジー〕——これらは憂鬱な気分で他の一切の感情を飲み込んでしまうのだが——さながらにやり切れない調子で書かれている若干の詩節も、非難を浴びることだろう。だがしかし、こいねがわくは、作者をして読者諸氏の注意をば、風刺作家にしては珍しい長所美点に、向けることを許されたい——すなわち、無礼な個人的当てこすりの欠如と、風俗を冗談半分に描写しつつも守り抜いた厳しい礼儀正しさとに。

[注釈]

注1) プーシキンは最初の長編叙事詩『ルスランとリュドミーラ』(1820)で衝撃的にロシア文学界に初登場した。ヴォルテール風の機知と皮肉が横溢しているこの作品は、お伽話風の筋立て、斬新澁刺とした描写、軽快なリズム、ユーモアとエロチシズムなどを特色とする。その後も長い間「新しいものの擁護者たちは」プーシキンを「ルスランとリュドミーラの詩人」という滑稽な称号で呼んだという。(ベリンスキイ『プーシキン論』(六)[小沢政雄訳. 光和堂. 1977] 参照)

注2) 「亭主が航海に出て何年も帰ってこない。若い細君がその留守に浮気をする。謝肉祭の夜、細君が恋人の伯爵と踊り楽しんでいるところにトルコ人の男が帰ってくる。これが亭主だったが、三人はコーヒーをのみなながら仲よく語らい、その後も仲よくつきあったという、軽い皮肉な話である。」[1818. / 小川和夫の要約による]

この『ベッポー』が『オネーギン』を想起させるというのは、その詩形についてなら格別、内容に関しては的外れである。むしろ、この部分の叙述は後に書かれた『コロームナの

家』(1830執筆か)にそっくり当てはまるものだ。後考を俟ちたい。

注3) 友人ベストウージェフに宛てた手紙(1824. 2. 8)で『バフチサライの噴水』について「ぼくの噴水が音を立てていることを喜んでいる。構想(プラン)不足はぼくの罪ではない」と書いたのを当局(ブルガーリン経由)に差し押さえられ、さらにその抜粋を「構想不足」云々として印刷公表されてしまった経緯がある。さらにまた『オネーギン』そのものについても、原稿を読んだ友人たちから作品としての構想不足を批判されていた。この部分にはそれらに対する不満や揶揄を読みとることができる。

注4) 『バフチサライの泉』(1824)へと続くバイロン風のロマンチックな詩篇の第一作(1823)。これらの作品は大評判をとり、著者の文名を高めた。しかし、この主人公がチェルケス娘のあとを追って身投げしなかったり、娘の死を傷まなかったのは《反詩的だ》《とんでもない》という批判が一部(ゴルチャコフ、ヴァーゼンスキイなど)から上がったたことに触れたものだろう。《反詩的》[アンティ・ポエティーチェスキー]とは見慣れぬ形容だが、つまりは《反文学的》ということらしい。おそらく『オネーギン』への批評の中で用いられたことば。言わんとするところは《ロマン主義的詩歌としてあるまじきだ》要するに《高潔な思想に殉じる英雄として主人公が描かれていない》ことを指すようだ。  
[1823.10.12.ゴルチャコフ宛の手紙を参照]

注5) 《最近の一連の悲歌》云々。はっきり確定できないが、「おお、どうしてあの人はきらめくのか」(1820)、「昼の明るい火が消えて」(1820作)「バフチサライ宮殿泉に」(1824)「どんよりと曇った一日が暮れ」(1824)「美しい人の愛で飾られた者は」(1824)などを指すものだろうか。

注6) 『オネーギン』を読んだベストウージェフはバイロンの影響を指摘するとともに、そこに『ドン・ジュアン』流の風刺が欠けていると書いてよこした。プーシキンはそれに対して『ドン・ジュアン』に『オネーギン』と共通するものは何一つない、『オネーギン』に風刺は少しもないと答えている(ベストウージェフ宛手紙。1825. 2. 24)。たしかに『オネーギン』にはバイロンのような痛烈な政治風刺や個人的あてつけは見られない。が、これには当時作者が事実上追放の身の上で、政治批判を自制し、著作を検閲される状態にあったことも関係していよう。皮肉なことに、プーシキン自身が手紙でこの作品について「『ドン・ジュアン』風のものだ」(1823. 11. 4.ヴァーゼムスキイ宛て)と述べたり、この序文で「バイロン」や「風刺的な作家」に自分から触れたために揚げ足を取られたわけで、その反省もあってか、やがてこの序文を削除することになる[「風刺的ということば自体、序文にあっちゃんならなかったのだ。」(ベストウージェフ宛。同上)]

[了]

# ПРЕДИСЛОВИЕ

к отдельному изданию первой главы

Вот начало большого стихотворения, которое, вероятно, не будет окончено.

Несколько песен или глав *Евгения Онегина* уже готовы. Писанные под влиянием благоприятных обстоятельств, они носят на себе отпечаток веселости, ознаменовавшей первые произведения автора *Руслана и Людмилы*.

Первая глава представляет нечто целое. Она в себе заключает описание светской жизни петербургского молодого человека в конце 1819 года и напоминает *Беппо*, шуточное произведение мрачного Байрона.

Дальновидные критики заметят, конечно, недостаток плана. Всякий волен судить о плане целого романа, прочитав первую главу одного. Станут осуждать и антипоэтический характер главного лица, сбивающегося на *Кавказского пленника*, также некоторые строфы, написанные в утомительном роде новейших элегий, в коих чувство уныния поглотило все прочие. Но да будет нам позволено обратить внимание читателей на достоинства, редкие в сатирическом писателе: отсутствие оскорбительной личности и наблюдение строгой благопристойности в шуточном описании нравов.



А. С. Пушкин. Художник  
И. -Е. -В. де Шатобрен. 1826 г.

*А. Пушкин*